諸現象の看護学的把握における看護者の認識の構造

新田なつ子（理論看護学）

【キーワーズ】　看護現象・現象の構造・対象認識・看護理論の適用・教育的支援

本研究の目的は，自己の看護教育実践過程において，看護学教員としての自己の意識にとまった諸現象について，自己の思考過程の特徴を分析して，看護理論を学んだ看護者の認識の構造を明らかにし，諸現象への看護理論の意識的適用を支援するための示唆を得ることである。

研究方法は，自己の教育実践過程において，意識にとまった現象における自己の認識を研究対象とし，個別の現象に看護理論を適用する過程でどのような認識が内在しているのか，その思考過程に焦点を当てる。

先ず，印象に残った場面を想起し，意識にとまった現象，自己の思考過程および表現を看護の原基形態にそって記述して資料とし，特徴的な認識を示すキーセンテンスを含む現象を切り取り，研究素材とした。各研究素材に含まれる看護上の問題，その問題への自己の判断根拠，および対象認識の特徴を取り出して分析し，実習指導過程および卒業研究指導過程の典型事例を取り上げ，比較検討した。

その結果，看護者の思考過程の特徴は，その看護過程に関与した人間の立場を追体験しながら対立のありかを探り，看護理論に照らして問題を焦点化すると，その対象の構造に見合った詳しさの内部構造に分け入り，さらにそこでの対立を明らかにし，対立間の複雑なつながりを浮き彫りにしていた。現象の構造をとらえられれば，学生は対立を調和する方向で患者の個別性に応じたより具体的な手段を選択しようと，おのずと看護理論に導かれて対象への関心を注ぐことができていた。

基礎実習指導においては，現象は比較的単純であり，学生は看護者と共同して看護過程を成立させていた。卒業研究指導で学生が対応困難となった現象はより複雑であり，現象と表象の連関をたどりながら，つながりを探し出し，関与するすべての人間に立場の変換をしながら問題の焦点を見極め，より詳細な構造を浮き彫りにしていた。

看護者は，対象認識するときには，経験が不足しているために表象化できない場合は，自己の生活経験をもとに表象像をつくり出しており，指導者は，経験のより少ない学生が対象の構造に応じた観察ができるように指導する必要がある等，指導の方向性が得られた。

現象の看護学的把握を支援するためのポイントを以下に示す。

1　現象が立体的な構造をもって本質とつながりあっていること，および，相互に影響し合って変化しているという大前提に着目させる
2　個別性-特殊性-一般性をそれぞれ浮き彫りにするためには，諸現象を，規準となる健康な人間の生活一般と比較するよう促す
3　個別の現象が複雑であればあるほど，表象化し単純化する作業を繰り返して対立の構造を明らかにし，つながりがみえやすくなるよう促す
4　看護にとって他者のおかれた情況を自己の頭の中に像として描くためには経験は不可欠であるが，自己の生活過程ですでに体験していることのうち，性質の似ている現象を手がかりに像として描くことを支援し，おのずと問いが発生して対象への関心が深まるよう促す